

名護屋城跡、ゾンサガ 新旧文化磨きで観光力アップへ

新型コロナウイルス感染症は「第6波」に突入し、観光産業への影響が懸念される。先行きは見通せないが、立ち止まってはいられない。地域資源を磨き、観光需要の回復に備える動きが始まっている。

虹の松原をはじめとした豊かな自然や食、唐津焼を代表とする伝統産業が息づく佐賀県唐津市。文化ツーリズムの拠点として自治体が力を入れるのが、唐津市鎮西町などに広がる国特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」である。豊臣秀吉が朝鮮半島に攻め入った「文禄・慶長の役」の前線基地として築き、徳川家康、伊達政宗ら全国の大名を集結させた場所だ。7年間だけ存在した「幻の巨大都市」を再びクローズアップし、観光需要を掘り起こす。

交差点に「伊達政宗陣跡」とついた名が、歴史ファンの心をくすぐる。各地の大名の陣跡は、観光客が自分と同じ出身地の代表名を見つけて感動する人もいう。

鉄道がなく、車やバスでしか来訪できないが、ここにしかない歴史と物語、玄界灘を臨む開放的な地がいざなう。「呼子のイカ」など周遊し、人口減少が続く地域の産業への波及効果に結びつけることが欠かせない。

城跡の一角にある県立名護屋城博物館には3月、「黄金の茶室」を再現する。見るだけでなく、体験型のプログラムも企画される。

文化の視点からもう一つ、アニメの「聖地巡礼」も挙げたい。佐賀県を舞台にした「ゾンビランドサガ」で登場した場所には今も多くファンが訪れる。主要キャラクターとともに各地の名所を描いたマンホールのふたが県内14カ所に登場し、ファンが巡ってSNSに投稿、佐賀来訪の呼び水になっている。県観光連盟が企画したゾンビランドサガのデジタルスタンプラリーは、従来と異なる客層を呼び、コロナ禍で落ち込んだ店舗や観光・宿泊施設へ一定の効果をもたらしている。

新旧の文化の力が、新たな観光の魅力を生み出す原動力となっている。今後も官民連携で持続的な振興策となるか注視したい。

佐賀新聞社 唐津支社長 辻村圭介



国特別史跡の名護屋城跡の全景
(2018年3月、南東からドローンで撮影、佐賀県立名護屋城博物館提供)



アニメ「ゾンビランドサガ」のキャラクターと
観光名所をデザインしたマンホールのふた
=佐賀県唐津市海岸通の唐津市歴史民俗資料館前